

奄美群島における芭蕉両面浮花織の伝承

多々良 尊子

1. はじめに

鹿児島県大島郡大和村の中央公民館内に村内の民俗資料を集めた「資料展示室」がある。そこに、両面浮花織の芭蕉衣が2点収蔵されている。誠実な手仕事によって織り上げられた上質なものであり、濃紺の色合いと細かな紋柄が静かで上品な佇まいを醸し出している。明治時代に大和村周辺で製作され受け継がれてきたものであり、当時の染織技術の高さを示している。芭蕉糸の質、藍染めの色合い、花織の精密さなどいずれも卓越しているが、これらは特別なものではなく、旧家にはもっと手の込んだ花織が残っているとのことである。

現在では、花織といえば、沖縄の伝統染織として認識されている。読谷村花織や知花花織は、愛らしいデザインで人気が高い。一方、奄美で花織が織られていたことはあまり知られていないが、その技術やデザインは沖縄に引けを取らないものである。

江戸時代の奄美の生活文化を描いた『南島雑話』^{注1}では、花織のデザインや織機の構造が図解されている。当時は広範に織られていたことが明らかであるが、明治時代末以降、大島紬が産業として興隆するとともに途絶え、忘れ去られていったものである。染織工芸の文化財としても、奄美各地に残されているノロ（琉球・奄美諸島の信仰における女性司祭）の衣裳の宗教性や華やかさと比較して、ひっそりと埋もれた存在である。1987年に鹿児島県大島紬技術指導センター¹⁾において、また、1990年に龍郷町の「花ろまん染織工房」²⁾において復元が試みられたことが報告されている。しかし、一般にも波及するような組織的な取り組みには至らなかった。博物館や資料館に収蔵されている花織は、現在では復元が困難な貴重な文化財であり、長く伝承していかなければならない。

本報では、大和村中央公民館および奄美市立奄美博物館に収蔵されている両面浮花織の芭蕉衣について調査し、その構成や意匠の特徴をまとめるとともに、奄美における花織の伝承について考察したい。

2. 花織の特徴

2-1. 花織の種類

花織は、平織地に緯糸または経糸を規則的に浮かせて模様を織り出す組織である。東南アジア各地で様々な技法の花織が織られていた。それらを源流として、沖縄県では、与那国町、那覇市（首里）、読谷村、うるま市（石川）、南風原町、沖縄市（知花、登川）などで織られていたことが確認されている³⁾。このうち、与那国と首里以外は明治30年代にいったん廃れてしまったが、読谷村花織と知花花織は第二次世界大戦後に復興を果たし、沖縄の伝統的工芸品として広く知られるようになった。奄美群島でも各地で織られていたと推測され、奄美大島、喜界島、徳之島の旧家や博物館・資料館等に花織の着物が伝わっている。

注1：1851年から1855年まで奄美大島に遠島になった薩摩藩の武士名越左源太が、年中行事、生活文化、動植物などを絵と短文で記録した諸記録をまとめて『南島雑話』と称する。いくつかの写本があるが、本報では、国分直一、恵良宏（校注）『南島雑話1・2 幕末奄美民俗史』および永井龍一『南島雑話補遺篇』によっている。

花織の種類としては、紋綜純（花綜純）を用いるものと用いないものに大別される。

①紋綜純（花綜純）を用いるもの

- ・片面浮花織：地組織に浮糸を織り込み、表に紋柄を表し、裏に浮糸を長く遊ばせる。経方向に浮糸を織り込むものを経浮花織、緯方向に浮糸を織り込むものを緯浮花織という。写真1-1～1-3は現在の読谷村花織である。裏に長く浮糸が出ている緯浮花織である。
- ・両面浮花織（織り込み花織）：地組織の糸を浮かせて柄を織り出すもので、表面は緯糸が、裏面は経糸が浮き、両面に柄が織り出される。裏面に遊び糸がなく、裏返しても使用できる。写真2-1および2-2は、1905（明治38）年頃に龍郷町で織られた両面浮花織である⁴⁾。また、緯浮花織と両面浮花織を組み合わせたものもある（写真3）。

②紋綜純（花綜純）を用いないもの

- ・手花織（縫取織）：模様を入れる部分を手や竹串などですくい、模様糸を織り込む。多様なデザインが展開できる。

現代の読谷村花織の一例

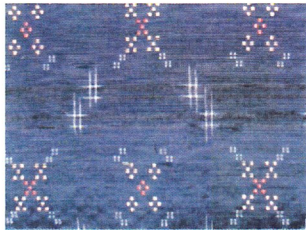


写真1-1 読谷村花織（表面）

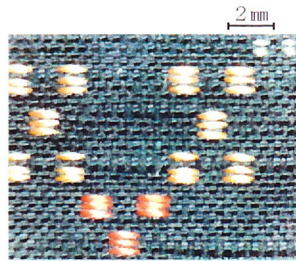


写真1-2 緯浮糸（表面）

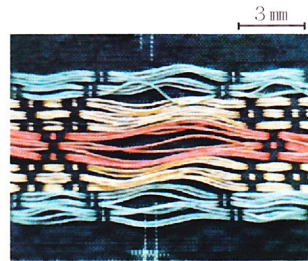


写真1-3 緯浮糸（裏面）

明治時代の奄美の両面浮花織

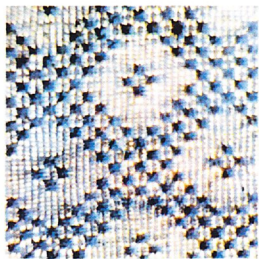


写真2-1 両面浮花織（表面）

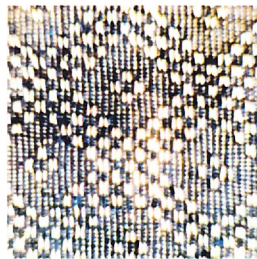


写真2-2 両面浮花織（裏面）

文田哲雄「大島における織物のデザイン伝承」⁴⁾から転載。経糸が絹、緯糸が木綿で、1905（明治38）年頃に龍郷町の益田民鶴さんによって織られたものである。民鶴さんは、これを「ティエーハジャ」と呼んでいた。ティエーは二重、ハジャはハヂの意味である。



写真3 両面浮と緯浮を組み合わせた花織（上部が表面、下部が裏面）
大和村中央公民館「長田須磨文庫」資料

奄美では、緯浮花織と両面浮花織が織られていた。前者を浮織、後者を花織と区別して呼んでいた。まとめて花浮（ハナウイ）ともいう。素材として、紬、芭蕉、木綿が用いられ、藍や車輪梅で染色された。現在、伝承されているものの多くは両面浮花織である。緯浮花織は、華やかな色彩の浮糸を用いる（「五色の浮織」と表現されていた）が、布の裏面に模様の糸がわたるため、裕でないと着用しにくいことから、両面浮花織が多かったのではないかと考えられる。

2-2. 花織のデザイン

写真2-1の両面浮花織のデザインを図1-1に、組織図を図1-2に示す。一般に、織物の組織図は経糸が上になっている部分を黒で塗りつぶすが、ここでは、表から見た柄を分かりやすくするために、緯糸が上になっている部分を塗りつぶしてある。地糸を灰色、浮糸を黒で表している。写真2-1および2-2でわかるように、表面は緯糸が浮き、裏面は経糸が浮いている。厳密には、両面とも同じ組織ではないが、浮糸の遊びがないので、裏返しても着用できる。また、経糸の色を2本おきに変えることにより、浮糸の色を際立たせることができる。

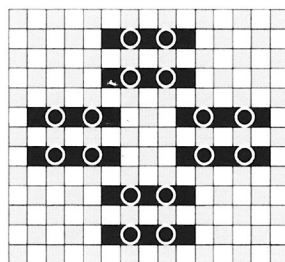
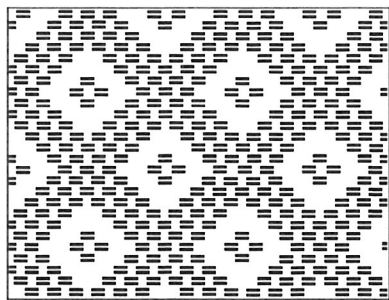
織り方としては、地機に紋綜統（花綜統）をつけて、○の部分で経糸を引き落として、緯糸を浮かす。紋綜統に経糸を2本ずつに掛けることにより、緯糸が経糸5本分浮くことになる。1段おきに2回同じ紋綜統を引き落とすことにより、緯糸の浮糸2本が一組となって一粒の点としてみえる。紋綜統に経糸を1本ずつ掛けて、緯糸を経糸3本分浮かす場合もあり、粒が細くなる。図1-2に示すようなハナのデザインであれば紋綜統2枚を用いて、単純に1枚ずつ踏めばよいが、複雑なデザインでは、紋綜統8枚を組み合わせて何通りかの踏み方をしなければならない。

写真2-1の両面浮花織については、紋綜統8枚を使用し、しかも、それを組み合わせて操作するという複雑な織り方である。1981年の時点で、

「したがって、この「花浮」が現物として残っているのは、この作品だけで、この貴重な技術の伝承については作者が高齢のため難しいとされている。」

「織に使用した織機は、地機（いざり機）であり、フヤ（綜統）も馬のしっぽを使ったりで、旧式な器具を手の技術と精神力で補っていたのである。」

と記されている⁴⁾。確かに、熟練の技術や力加減、作業を継続する根気は必要であっただろうが、紋綜統をつけて蹴落とすという単純な技法で、デザインを多様化することができた。地機では織物組織の変化がつけにくいので、「手わざ」の工夫が重ねられ、伝播していったと考えられる。織糸の色のコーディネートや緋糸との組み合わせも加えると、無限のデザイン展開が可能であり、創作意欲をかきたてるものであっただろう。



紋綜統①
紋綜統①
紋綜統②
紋綜統②
紋綜統①
紋綜統①

図1-1 写真2-1の両面浮花織のデザイン 図1-2 写真2-1の両面浮花織のハナの部分の組織図
○は経糸を引き落とす位置

3. 奄美の花織の歴史

3-1. 『南島雑話』に描かれた江戸時代の花織

『南島雑話』には、江戸時代の奄美の衣生活文化について、身分による服装の違い、養蚕の方法や芭蕉から糸をとる方法、着物の構成に至るまで、詳細に描写されている。花織にかかわる記述としては、

「諸横目以上日勤には、廣袖の中袖の衣服に、博多小倉等の帯を用ゆ。平日には紺染の湯巾帯を用ゆ。諸横目等の礼服、練肌絹と云木綿の浮織にて紺織にて、濃き薄きは人々の好みに随ふ。諸横目以上の子供等の冬服の能きは木綿のこんにち五色の色を様々浮けて織出して着る。奇麗なることなり。諸横目以上富豪の童子は紫縮緬の湯巾帯を用ひ、其の外は何れも紺染の湯巾帯なり。」⁵⁾

ここで、横目という役職以上の役人の礼服が紺色の木綿の浮織（恐らく、両面浮花織）であること、役人の子ども達の冬服が紺地に五色の柄の浮織（恐らく、緯浮織）であることが記されている。また、広袖の打掛の絵に添えられた解説文として、

「此服を大袖と云。女子祝に着する服なり。平常の服の上に帯なしに着す。裕の衣服なり。地合袖もあり、木綿もあり。種々浮けに紋を織出す。大抵左に図す。紋なきもあり。」とあり、女性が正装として羽織る裕仕立ての着物の素材について、紬または木綿の、花織または無地の平織りであることが記されている⁶⁾。それに続いて、花織のデザインが描かれている。斜線を交差させて菱形を構成したタスキ柄を基本として、それを多様に展開している。『南島雑話』の挿絵からデザイン図を作成したものを図2-1～2-5に示す。また、花織の織り方として、

「紋を出すに浮け花と云へるあり。是は地の糸より外に糸を入れて織るを云。亦引落と云へるあり。是は地の糸にて紋を織るを云。引落しは浮け悉くうけば、浮けよし。」⁶⁾とある。ここでは、地の織糸に浮糸を加えて織る片面浮織を「浮け花」、地の織糸を浮かして柄を織り出さず両面浮花織を「引落」としている。当時、奄美で使用されていた地機（図3-1）を用いて、経糸を紋綜統（花綜統）に通し、板を踏み落とすことにより織糸を浮かす仕組み（図3-2および3-3）が説明されている。

注2：『わが奄美』⁷⁾によれば、奄美の女性の礼装は、七枚重ねであった。胴衣（ドギン）、襦袢、小袖などを重ねて、その上にタナベという芭蕉花織の打掛を羽織る。

『南島雑話』に描かれている花織のデザイン⁶⁾

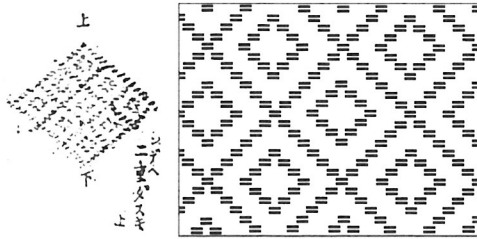


図2-1 二重ダスキ
ダスキの中に二重に菱形を加えたもの。
二重のふりがなとして「ンデハ」とある。

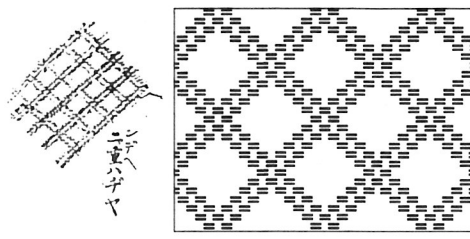


図2-2 二重ハヂヤ
二重線のダスキ柄。蚕を育てる籠をハヂとい
い、それに因んだ名称。

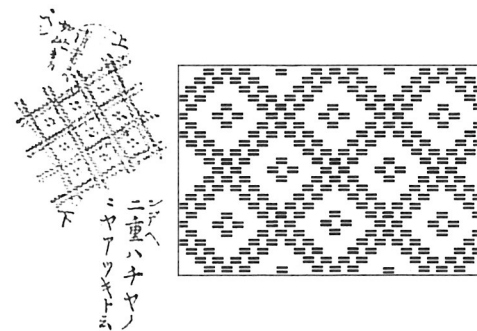


図2-3 二重ハヂヤのニヤアツキ
二重ハヂヤの菱形の中に、4粒の浮を十字に
配したハナを加えたもの。「清書ニテ如此書ク
ベシ」として、上下が書き加えられている。

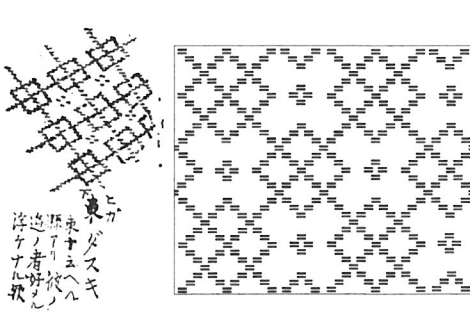


図2-4 東ダスキ
東と云へる県(大和村より南、加計呂麻まで)
で好まれたデザイン

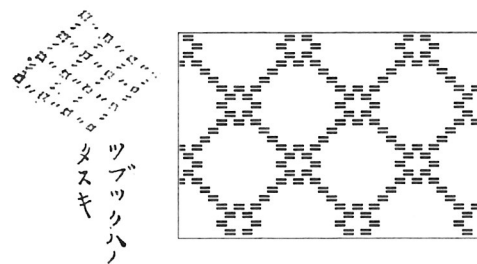


図2-5 ツブツクハノダスキ
ダスキ柄に小さな粒を加えたもので、恐らく
緯浮花織ではないかと思われる。

『南島雑話』に描かれている花織の織り方⁸⁾

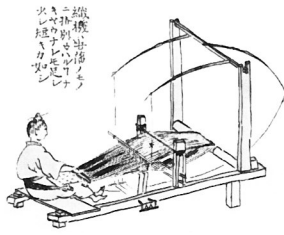


図3-1 織機の構造
「織機は吾藩のものに格別かはる事なきやうなれども足短きが如し」

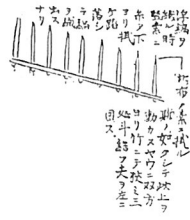


図3-2 踏み落としの仕組み
「浮織を織る時堅素に糸を下より掛け踏み落して縞を織出す也此処布の素に掛る斯くの如くして此上を動かぬやうに双方より竹にて挟み三処結ふ夫を図す」

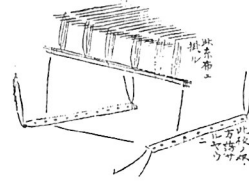


図3-3 紋綜統（花綜統）
「此糸布に掛る
此板双方落さるやうに」

3-2. 長田須磨が描いた明治時代の花織

大和村中央公民館に、郷土史家の長田須磨さん^{注3)}の資料を集めた「長田須磨文庫」がある。花織についての研究ノート、手書きの図や写真などが残されている。また、東京国立博物館には、長田須磨さんが受け継いでいた太（現在の太和）家伝来の工芸品が収蔵されている。ノロの遺品である神扇や胴衣（ドギン）、礼服である朝衣（チョウギン）など、文化的な価値のある品々とともに、花織の衣裳3点が含まれている（後述）。『奄美随想わが奄美』の中でも、カラー口絵⁹⁾で資料を掲載するとともに、両面浮花織の芭蕉衣を「奄美最高の織物」「先祖の残した最高の品」「打掛の格」と評している。しかし、一方で、地味で控え目な色柄を琉球王室伝来の華やかな染織と対比させている。その背景には、薩摩藩による生活全般にわたる統制の厳しさがあつたとして、次のように述べている。

「奄美は、明治二十年すぎ頃やっと紡績木綿が自由に買えるようになったのではないだろうか。その頃は色目も、置目（規則）から除外されただろうに、奄美上層部では旧習を則って、色糸も少なく、柄も小柄の花織、浮織をしての打掛が使用されていた。この奄美最高の織物は、琉球王室のものと織方は同一のものであるが、王室の柄の大きさ、糸の華やかさは王宮としての気品と豪華さを語るふさわしさが顕然と付んでいる。

奄美最高の打掛は雨にぬれた綿のようにしょんぼりした感じで、時代身分圧政が如何にひどかったかが、衣の上に判然と浮彫りにされているのを深く感じた。」¹⁰⁾

琉球における花織は王妃・王女の宮廷衣装や上流士族の礼服であり、格が高く、華やかなものであつた¹¹⁾。一般庶民には着用が禁じられていたが、明治時代以降は着用できるようになっていった。一方、奄美では1720年（享保5年）、薩摩藩より奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島の4島に対して、

「与人、横目、目指、筆子、拵までの役人には袖着用を許すが下の者には袖着用一切許さず」¹²⁾

という禁令が出された。さらに、1777年に薩摩藩による砂糖総買入制により、養蚕や綿作

注3：1902（明治35）年大島郡大和村に生まれた郷土史家である。前報（「長田須磨が描いた明治時代の奄美の衣生活文化 - 芭蕉布から木綿へ -」鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第43号（2011）p.31～42）で詳しく紹介している。

に労働力を割くことができなくなった。また、移入される綿糸が高価であったことから、庶民の衣服は芭蕉が中心で、明治中期以降、木綿の価格が安くなるまで続いた。そのような政治的な背景から、華やかな色彩のない地味で細かい柄を、薩摩藩の支配による抑圧によるものとしている。しかし、それだけではなく、小さい柄を上品とする、全面を柄で埋め尽くすのではなく余白を良しとする、という美意識も関わっているのではないかと推測される。厳しい生活環境の中でも、染織の工夫はなされたであろうし、富裕層においては、遠目には無地としか見えないが実は非常に手間がかかっていることを贅沢としていたのではないとも考えられる。しかし、手間をかけた花織を着ることができたのは、奄美でも一部の上層階級にしか過ぎない。一般庶民は無地の粗芭蕉衣（アラバシャギン）を仕事着として一年中過ごしていたことを忘れてはならない。

4. 奄美群島に伝承されている花織

奄美群島の資料館・博物館等に収蔵されている花織および文献で確認できる花織を列挙する。個人が所蔵しているものもあるが、非公開であり、今後の調査・研究に期待したい。

4-1. 博物館・資料館等

- ・大和村中央公民館資料展示室
紺地両面浮花織芭蕉衣（後述5-2）、藍染経縞両面浮花織芭蕉衣（後述5-3）
- ・大和村中央公民館長田須磨文庫
資料の中に花織の端切れが添付されている（写真3）
- ・本場奄美大島紬協同組合大島紬資料館
木綿経縞花織袴（江戸時代）、草麻藍染め花織朝衣（江戸時代後期）、花織芭蕉衣（明治43年）
- ・奄美市立奄美博物館
片身替り芭蕉帷子（後述5-1）
- ・東京国立博物館
紺地格子緯花織衣装（江戸時代、列品番号 K-39093）、芭蕉浅葱地経縞緯緋花織衣装（江戸時代、列品番号 K-39085）、芭蕉紺地両面花織（江戸時代、列品番号 K-39088）。いずれも、東京国立博物館情報アーカイブ（<http://webarchives.tnm.jp/archives/>）で見ることができる。

4-2. 文献で確認できる花織

- ・『奄美芭蕉布再生プロジェクト活動報告書』¹³⁾
「2009年度調査 芭蕉布一覧」で、大和村で織られた花織芭蕉衣が1点（個人蔵）確認されている。
- ・『織の海道 奄美・鹿児島・久留米編』¹⁴⁾
宇検村の個人蔵の花織の写真が掲載されている。
- ・大和村指定文化財一覧¹⁵⁾
芭蕉布5点とあり、花織が含まれている。
- ・(旧) 奄美染織資料館の文化財診断台帳
大和村のもので花織と思えるものが6点記載されている。そのうち、「No.34芭蕉衣」は、関実時氏所有で、明治28年頃長原政千代製作となっているが、大和村指定有形文化

財の芭蕉衣(自宅保管)と同一の写真が添付されている。これが、現在奄美博物館に収蔵されている片身替り芭蕉帷子(後述5-1)と思われる。「No.35木綿五色花織」も関実時所有となっているが大和村指定文化財一覧では、晨原光雄所有となっている。

・『鹿児島県大島紬技術指導センター昭和62年度業務報告書』¹⁵⁾

花織および浮織の資料として、20点が調査され、そのうち15点が復元されている。調査された資料20点のうち、江戸時代後期から明治時代にかけて大和村で製作されたものが16点を占め、その他、龍郷町が3点、笠利町が1点である。大和村から龍郷町にかけて、花織が広く製作されていたことがわかる。8点については、製作地が大和村、所在地が東京都となっており、長田須磨さん所有のものと思われる。組織図を比較し、『わが奄美』のカラー口絵⁹⁾に掲載されているものであると確認できた。

・『龍郷町誌 民俗編』¹⁶⁾

町内に残っている花織の着物3点が掲載されている。益田民鶴さん(明治15年12月20日生まれ)が明治37年頃製作したもの(写真2-1)、川上カネマツさん(天保10年生まれ)によるもの(経糸が絹、緯糸が木綿、琉球藍染めで、現在は名瀬にあるとされている)、および、150年以上前に製作されたとされる芭蕉花織である。

・『奄美染織史』¹⁷⁾

徳之島で織った草木染の浮織(浮織となっているが、図1-1と同じ複雑なデザインの両面浮花織である)、今里の五色の浮織(白黒写真なので色が判別できないが緯浮織)、チョマ・芭蕉糸による浮織り布が紹介されている。

5. 花織の調査結果

2012年3月に奄美博物館および大和村中央公民館に収蔵されている花織の着物3点について調査した。

5-1. 片身替り芭蕉帷子

奄美博物館に収蔵されている片身替り芭蕉帷子(写真4-1)は、上述のように、(旧)奄美染織資料館の文化財診断台帳の「No.34芭蕉衣」および大和村指定有形文化財の「芭蕉衣(自宅保管)」¹⁵⁾の写真と同一のものと見られることから、収蔵先が変わったと考えられる。

右身頃と両袖は、芭蕉経縞両面浮花織(写真4-2~4-4)である。緯糸は芭蕉、経糸は白木綿(太さが不均一なので手つむぎと思われる)1本、芭蕉3本、藍染芭蕉1本、芭蕉3本の繰り返しである。藍と白の経縞と二重タスキの両面浮花織の組み合わせであるが、経糸の密度が粗いので、浮織が少し間延びして見える。

左身頃は、芭蕉交織経縞緯緋(写真4-5および4-6)である。緯糸は芭蕉緋糸14本と芭蕉糸20本、経糸は白木綿(太さが不均一なので手つむぎと思われる)1本、芭蕉2本、白木綿1本、芭蕉8本の繰り返しである。緯糸の茶の緋糸で水玉を、経糸で白の経二重ストライプを表わしている。芭蕉糸は太さが不均一で、着用による損傷が見られる。

寸法は、図4に示すとおりである。衿は白の木綿を用いている。布幅をいっぱいを使い、左身頃は肩山で、右身頃は前身頃の肩山から12cm下で接いである。袖は半幅で、袖口は耳のまま、袖下は縫っていない。袖丈は短い、身八つ口は空けてある。緋や花織は、晴着用に織られたもので、最初から着丈の短い帷子ではなかったと思われる。経縞両面浮花織

は、寸法から推測すると、元の着物の両袖を肩で接いで身頃に、片方の衽を左右の袖にしたと思われる。経縞緯緋の方は、87cmと63cmの2枚を使っている。縫糸は木綿糸であり、貴重な芭蕉布を大正時代以降に仕立て直したものではないかと思われる。

片身替り芭蕉帷子（奄美博物館所蔵）の緒元

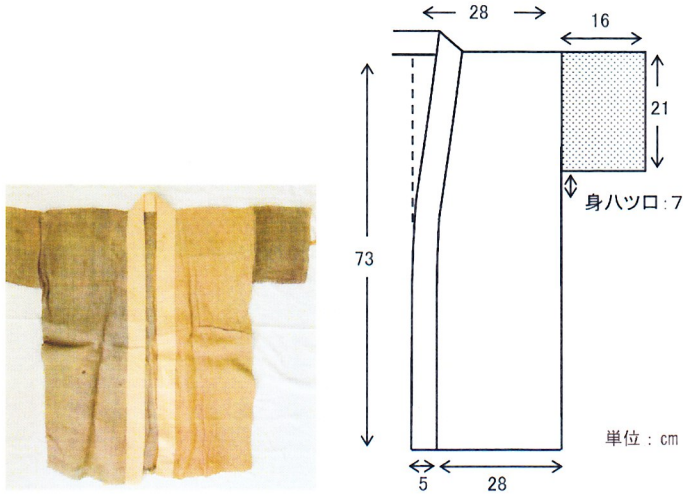


写真4-1 片身替り芭蕉帷子

図4 片身替り芭蕉帷子の寸法



写真4-2
芭蕉経縞両面浮花織

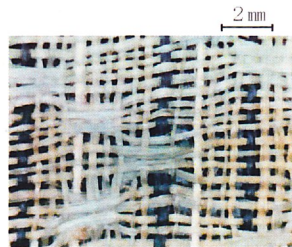


写真4-3
芭蕉経縞両面浮花織（表面）

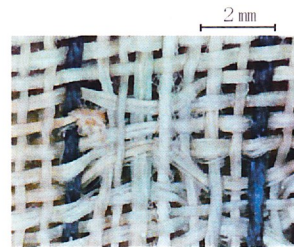


写真4-4
芭蕉経縞両面浮花織（裏面）

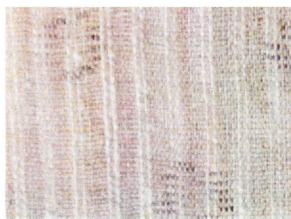


写真4-5
芭蕉交織経縞緯緋

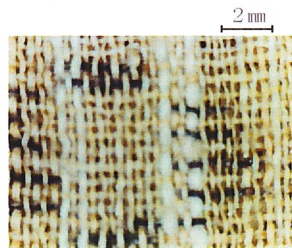


写真4-6
芭蕉交織経縞緯緋（表面）

5-2. 花柄両面浮花織芭蕉衣

大和村中央公民館資料展示室に収蔵されている花柄両面浮花織芭蕉衣を図5および写真5-1～5-3に示す。『鹿児島県大島紬技術指導センター昭和62年度業務報告書』¹⁾で、「資料No. 7および8：龍郷町で製作、所在」となっているものではないかと思われる。

織糸5本分の浮糸を8つ組み合わせてハナを表現し、それをハーフステップで送ることにより、斜線の効果で動きのあるデザインとなっている。白と藍の経糸を用いているので、表は藍色の緯糸が浮き、裏は白の経糸が浮き、浮織のハナが明確に表れている。緯糸は藍芭蕉糸で、肉眼では黒に見えるが濃紺である。太さが均一で、糸の結び目が目立たない。経糸は藍1本、白1本、藍1本、クリーム色1本の繰り返して、素材は断定できない（白は生糸、藍はガス糸か）。

組織図は、図5-2に示す通りである。単純に見えるが、紋綜紬4枚を使用した織り方である。

寸法や縫い方は本土式に近い。縫代が比較的多くとっており、袖丈も長い。衿先も、広衿風に裏衿をつけて折り返す仕立て方をしている。肩あて、居敷あてだけでなく、裾にも木綿の当て布をつけてあり、大事に着用したものだとわかる。明治38年頃織られた写真2-1と組織が類似しており、また、本土式の裁縫教育が普及したあとの仕立て方であることから、明治後期に製作されたと思われる。

5-3. 藍染め両面浮花織芭蕉衣

大和村中央公民館資料展示室に収蔵されている藍染め両面浮花織芭蕉衣を図6-1および写真6-1～6-3に示す。

布幅は約34cmで、縫代の幅を節約して仕立ててある。寸法は標準に近いが、共衿はついていない。衿下や振りの縫代の始末も三つ折りぐけではなく、一目落として押さえてあり、縫目も粗い。仕立て方は、本格的な裁縫教育を受けていない人のものではないかと思われる。しかし、織物は、素晴らしい出来上がりである。経糸・緯糸とも芭蕉で、糸の太さのむらが小さい。組織図は、図6-2に示す通りである。単純なタスキのデザインであるが、浮糸も揃っていて均質に織れている。染めも非常に良く、変退色も目立たない。

以上のように、奄美には、芭蕉両面浮花織の足跡が様々な形で残っていることがわかった。博物館や資料館などに収蔵されている資料は、現在では復元できない貴重なものであり、大切に引き継いでいかなければならない。それだけでなく、個人で所蔵されているものもあり、さらに調査を進める必要がある。芭蕉布、しかも技術を要する花織が、奄美群島で生産され着装されていたことを伝えていくために不可欠なものである。厳しい生活の中で、衣服を自給自足で購っていくことは大変な負担であり、若い女性が強制的に貢朝布を織らされたという悲話もある。しかし、織物や裁縫は創造的な仕事でもある。限りない工夫とごまかしのない手作業が、生活文化を形成していったことを物語っている。

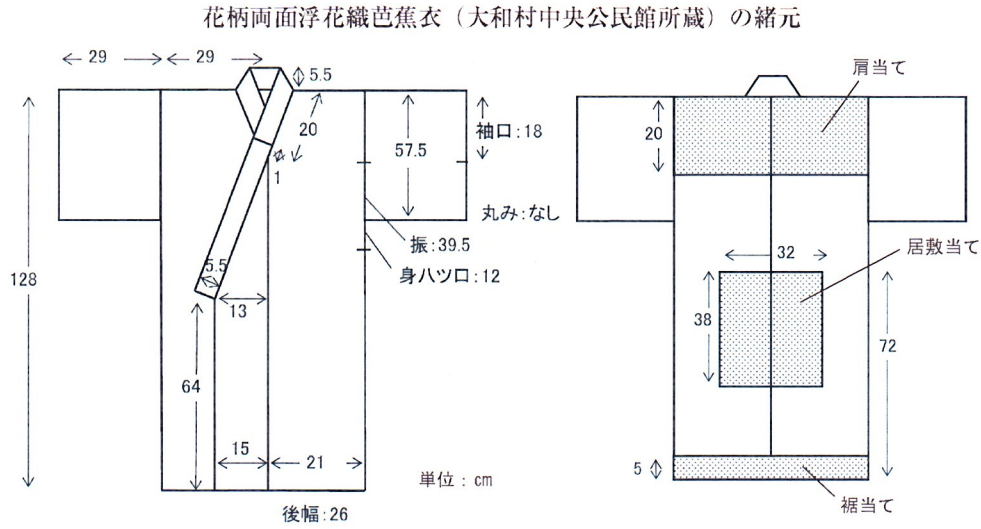


図5 花柄両面浮花織の寸法

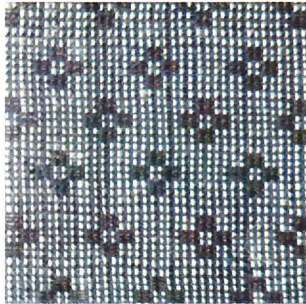


写真5-1
花柄両面浮花織（表面）

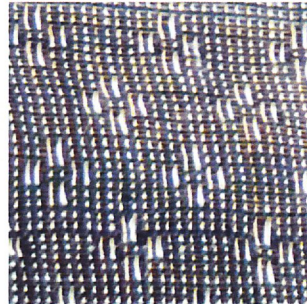


写真5-2
花柄両面浮花織（裏面）

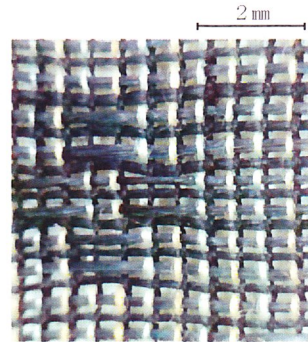


写真5-3
花柄両面浮花織（表面）

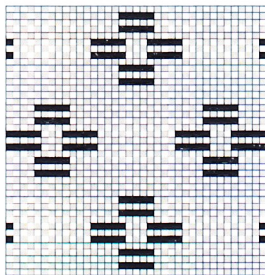


図5-2
花柄両面浮花織の組織図

藍染め両面浮花織芭蕉衣 (大和村中央公民館所蔵) の緒元

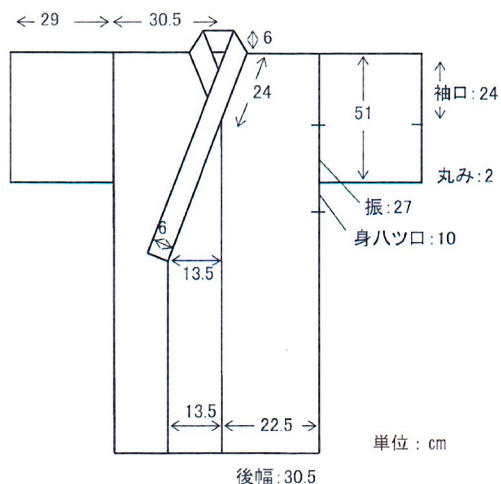


図6-1 藍染両面浮花織芭蕉衣の寸法

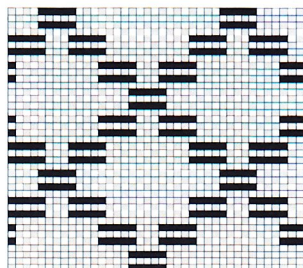


図6-2 藍染両面浮花織の組織図

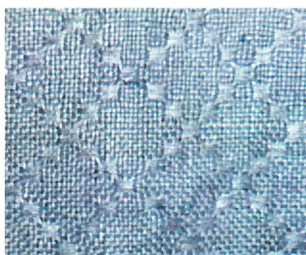


写真6-1 藍染両面浮花織

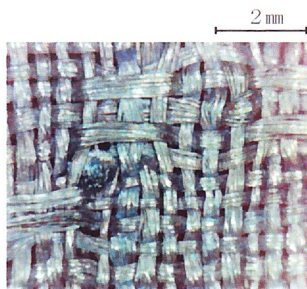


写真6-2 藍染両面浮花織 (表面)

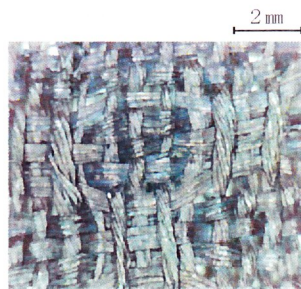


写真6-3 藍染両面浮花織 (裏面)

謝 辞

貴重な資料を撮影させていただいた奄美市立奄美博物館、大和村中央公民館および調査にご協力いただいた「奄美芭蕉再生プロジェクト」実行委員長の内山初美さんに感謝の意を表します。

文 献

- 1) 黒川美智子「古典紋柄の復元」鹿児島県大島紬技術指導センター昭和62年度業務報告書, p.26-31 (1998年)
- 2) 安田謙志「奄美花織の復元と創作」染織 a 112号, 染織と生活社, p.44-49, (1990年)
- 3) 与那嶺一子, 幸喜新「県博所蔵の染織資料Ⅲ」沖縄県立博物館紀要, 27号, 29-45 (2001年)

- 4) 横山正敏他『大島紬の研究－経済・科学・デザイン－』鹿児島県立短期大学地域研究所, p.208-213 (1986年)
- 5) 名越左源太(著) 国分直一, 恵良宏(校注)『南島雑話 1 幕末奄美民俗史』平凡社, p.32 (1984年)
- 6) 5) と同じ, p.36-38
- 7) 長田須磨『奄美随想 わが奄美』海風社, p.209 (2004年)
- 8) 5) と同じ, p.51-52
- 9) 7) と同じ, p.169-176
- 10) 7) と同じ, p.193
- 11) 与那嶺一子「芭蕉布のあゆみ」美しいキモノ188号, 婦人画報社, p.58-61 (1999年)
- 12) 昇曙夢『大奄美史』奄美社, p.267 (1968年)
- 13) 奄美芭蕉布再生プロジェクト実行委員会『奄美芭蕉布再生プロジェクト活動報告書』, p.7-8 (2010年)
- 14) 堂前亮平(監)『織の海道 奄美・鹿児島・久留米編』織の海道実行委員会, p.126 (2005年)
- 15) 大和村役場ホームページ「大和村指定有形文化財」<http://www.vill.yamato.lg.jp/yamato01/yamato34.asp>
- 16) 龍郷町誌編さん委員会『龍郷町誌 民俗編』p.652-661 (1998年)
- 17) 茂野幽考『奄美染織史』奄美文化研究所, p.44, p.47, p.43 (1973年)